関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

役割と社会的スキルがからかい認知に及ぼす影響

著者	遠藤 由美
雑誌名	関西大学社会学部紀要
巻	38
号	3
ページ	119-131
発行年	2007-03-30
その他のタイトル	Effects of Social Skills and Role in Teasing on the Perception of Teasing Incidents
URL	http://hdl.handle.net/10112/12393

関西大学『社会学部紀要』第38巻第3号，2007，pp.119-131　ISSN 0287-6817

役割と社会的スキルがからかい認知に及ぼす影響

遠　藤　由　美

Effects of Social Skills and Role in Teasing on the Perception of Teasing Incidents

Yumi ENDO

Abstract

Teasing constitutes ambiguous interpersonal behavior that some people perceive to be fun and other people view as hostile. These perspectives might reflect the views of teasers and targets, as well as those of individuals with high levels of social skill and those with low levels of social skill. The present study aimed to examine the effects of social skills and the role in teasing on the perception of teasing incidents, by using an experimental design of 2 (role: teaser vs. target) × 2 (social skills: high vs. low) with role as a within-participant factor and the latter as a between-participant factor. A group of 90 undergraduates participated twice, within an interval of about 6-months. They were asked to relive their experiences of a teasing incident either as a target or as a teaser from their past memory, and to complete various questions about them. The results showed that only targets with low social skills regarded their experiences very negatively, whereas targets with high social skills perceived the event as humorous and as less damaging than did teasers. These results suggest that roles in a teasing situation and individual differences with respect to social skills result in different subjective constructions of teasing.

Key words: teasing, role, social skills, subjective constructions

抄　　録

からかいは曖昧で多義的である。からかいは問題行動だとされる一方で、親密な関係において社会的絆を深める関係促進効果を持つという指摘もある。このような意味の違いは、役割（teaser vs target）と社会的スキルによってもたらされるかもしれない。本研究は、役割と社会的スキルがからかいの意味に及ぼす影響を検討することを目的として、役割（参加者内要因）と社会的スキル（参加者間要因）を交絡させたデザインで、質問紙実験を約半年の間隔を置いて２度実施した。参加者は大学生90名で、１回は誰かにからかわれた経験、他の１回は誰かをからかった経験を思い出すよう要請された。彼らは、それぞれ経験をどのように理解し評価しているかについて回答し、社会的スキルやからかいへの態度などの質問項目へも回答した。その結果、冗談意図とtargetの傷つき感情において、役割と社会的スキルとの交互作用が得られ、社会的スキルの低い者は、自分の役割によってからかいに対する認知が異なり、からかわれた時はそれをより否定的にとらえていたが、からかう側に立った時にはより肯定的にとらえていた。社会的スキルの高い者においては、このような役割による違いは認められなかった。社会的スキルの高い者は、からかい一般に対して肯定的な態度を示し、日常的にからかったりからかわれたりする経験が多いと報告した。このような結果は、からかいにおける役割と社会的スキルの個人差が、からかいに対する主観的理解を異なるものとすることを示唆する。

キーワード：からかい、役割、社会的スキル、主観的構成

からかったりからかわれたりした経験は誰しもが持っているであろう。からかいは、また落語や漫才などの日本の話芸の中にも頻繁に登場する。からかいは、日常の社会的相互作用において容易に観察することができる極めて一般的普遍的な行為である。「からかい」という語でWeb検索をおこなうと、からかわれた者が自らの否定的な経験を書き綴ったさまざまな文書に行き当たることからも、からかいは日常生活の中に広く行き渡っている社会的行為であると考えられる。

このように日常的に発生頻度が高くありふれた行為であるからかいは、しかし、教育関係機関や関係者から「許されない行為」として見なされているようである。我が国において、文部科学省（2006）は、「生徒の問題行動」に関する報告書の中で、小学校中学校高校の生徒のいじめにおいて、もっとも多いのがからかいであると報告している。また、総理府のセクシュアル・ハラスメントに関する報告書（2002）では、やはり、からかいがセクシュアル・ハラスメントの中で最も多いことが示されている。からかいは、その対象者に向けられた言語的攻撃行動であり、有害な帰結をもたらすことを指摘する研究者は多い（例：Roberts & Coursol, 1996）。つまり、からかいは、もっぱら他者に向けられた問題行動ないし攻撃行動として位置づけられているわけである。

他方、からかいを異なる角度から見ると、別の様相があらわれる。言語やコミュニケーションの研究者たちの中には、からかいが親子や恋人同士の間でかわされていることに注目し、親密感情や愛情、笑いや微笑みの交換機能があると主張する者もいる（例：Eder, 1993; Eisenberg, 1986）。ある意味において、からかいは親密な関係において発生する愛情の間接的表現であり、人々の間にある絆を固め関係を促進する働きをしている、という見方である。この観点に立てば、からかいという行為は、からかいあえるほどに親しいということを当事者同士が確認するものとなり、快経験の共有をもたらす。

からかいは、このように一方では問題行動視され、他方では関係促進機能をもつ向社会的なものと見なされている。ただ、これは、からかいには攻撃行動としての悪いからかいと、関係促進的な善良なからかいという2種類があり、それらは容易に弁別できるような明確な輪郭線をもった異質なものである、ということを意味しない。仮にそうであるなら話は単純であり、悪いからかいは禁止抑制され、その犠牲者は同情され救済されなければならないし、からかった者は非難されるべき者として扱われる。他方、善良なからかいは奨励され積極的に取り入れられるべきものとして見なされるだろう。

しかし、からかいが厄介なのは、それ自体が曖昧性を帯びているからである。すなわち、よいからかいなのか悪いからかいなのか判別するのは多くの場合、非常に困難である。も

し、攻撃性だけが顕著であればそれはからかいよりも攻撃やいじめと呼ばれ、もしユーモアや愛情表現だけが顕著であればそれは冗談や思いやりなどと呼ばれるのがふさわしい（Kowalski, Howerton, & McKenzie, 2001）。Shapiroとその協同研究者たちは、からかいは、攻撃とウィット、曖昧性が混じり合った合成物であると述べている（Shapiro, Baumeister, & Kessler, 1991）。ある発言に対して、受け手がそこに肯定的なメッセージを読みとるか、あるいは否定的なメッセージを読みとるかによって、からかいは攻撃とも愛情表現や冗談ともなりうるのである。さらにまた、発話者が発言に込めたつもりの発話意図を、受け手がどのように読みとるかによっても、ある１つの発話行為に複数の意味が生じる可能性があることになる。つまり、からかいはその曖昧さゆえに、状況や立場、個人的要因などによって、ある場合は快活さや親密さ、また別のある場合は残忍さや冷淡さを示すものなど、そのつど異なった側面を伴って立ち現れてくる（Kowalski, 2004; Leary, Springer, Negel, Ansell, & Evans, 1998）。あるからかいそれ自体がよいか悪いかを一義的に判定できるものではなく、当事者の認知理解を通してからかいの意味が決まり、そのように主観的に構成された意味に対して人々は反応する。

では、どのような要因がからかいの意味決定に関わるだろうか。最近の研究は、まず第１に、からかいにおける役割（teaser vs. target）を挙げている（例：Kowalski, 2004; Shapiro, Baumeister, & Kessler, 1991）。Kruger, Gordon and Kuban（2006） はからかいにおける役割に焦点をあてた研究の中で、teaserの意図がからかいの意味を方向づけることを示した。つまり、日常生活において展開されるからかいの多くは、teaserが“軽い冗談のつもり”で発しているが、このような意図はteaser自身には明らかであっても、targetには相対的に伝わりにくい。そのため、teaserはからかいを相手と親密だからこそ冗談として言ったのだと理解し、他者も同様に理解するはずだと推測するが、他方targetにはその意図が明らかではなく、仮に冗談の可能性を察知しても確信がもてないため、完全に冗談だとは考えず、相対的に否定的な意味を読み取ってしまうのである。このような説明は、近年増えてきている主観性や思考判断の自己中心性の研究（例：Keysar, Barr, & Horton, 1998; Kruger, 1999; Windschitl, Kruger,& Simms, 2003）に基づいたものであり、ある個人の内的思考や活性化した知識は当該個人にとって容易に接近可能であるため、それを手がかりとして思考判断をおこなうという、人のもつ一般的な傾向と関連している。事実、からかいにおける役割によって、それぞれの立場にある者が行為者の発話意図や対象者の感情について、一貫して対称的な理解をすることがこれまで示されている（Kowalski, 2000; Kruger et al., 2006）。

しかし、役割要因だけがからかいの意味を決定する唯一の要因というわけではない。大渕（2002; 2006）はいじめに関する論考の中で、からかいが社会的関係促進機能をもつためには、からかいの当事者双方（teaser とtarget）が十分な社会的スキルをもつ必要があると論じた。からかいは社会的相互作用の1種であるにもかかわらず、奇妙なことに、からかいにおける社会的スキルの影響についてはこれまで実証的な研究は見あたらない。また我が国では、そもそもからかいについての実証的研究自体がほとんどない。

ENDO（in press）は、役割と社会的スキルによって、からかいの意味がどのように影響されるかについて実証的検討を試み、大学生を参加者としてナラティブ記述を求め、想起されたからかい（teaser）経験またはからかわれ（target）経験をさまざまな尺度で評定させた。その結果、欧米での先行研究と同様役割の効果が認められた。さらに重要なことに、役割と社会的スキルが交絡し、社会的スキルによってtarget経験の意味に違いが認められたが、teaser経験では社会的スキルによるそのような違いは認められなかった。このような結果は、以下の2点を示唆する。第1に、大渕（2002; 2006）が指摘するように、社会的スキルによってからかいに付与する意味は異なるものの、それはからかわれる者（target）の立場に立った時だけであり、からかう者（teaser）の立場に立つと、社会的スキルは効果をもたない。第2に、からかわれる立場に立った時、社会的スキルの低い者は高い者に比べてからかいに否定的メッセージを読み取るが、社会的スキルの高い者がからかわれた場合はからかう者と同じような理解をし、立場の違いにかかわらずからかいに肯定的であった。言い換えれば、他の研究者も指摘するように（e.g., Winfrey, 1993）、からかいの意味を規定するのはからかわれた者つまり対象者であり、targetが高社会的スキルの持ち主であれば、からかいはからかいコミュニケーションの両端に居る者双方にとって何ら否定的なものではなかった。しかしtargetの社会的スキルが高くない場合は、teaserが冗談のつもりであっても、そうは受け止めずに傷つきを経験してしまう傾向が見られたのである。

社会的スキルが受け手の受け取り方を規定し、からかいそのものの性質を決定することを、この研究が初めて実証的に示したことは意義深い。しかしながらこの研究には、2（社会的スキル：上位群 vs. 下位群）×2（役割：target vs. teaser）のデザインにおいて、2要因を参加者間要因としたという弱点があった。つまり、これら4グループに所属する個人がすべて異なっていたのである。この研究では、参加者は学生番号の偶数と奇数でtarget経験想起群とteaser経験想起群に分けられた。これらの2群は、それぞれ91名と十分な人数が確保されていた。しかし、ランダムとは言え、社会的スキル得点は両群で違い

が認められた。他の何らかの特徴においても、両群間で違いがないとは言い切れない。結果は低社会的スキル者のtarget経験記述群とteaser経験記述群ではからかいの受け止め方が異なることを明らかにしたが、この違いは何らかの個人要因における両群の違いを反映している可能性を完全には否定できない。

そこで、本研究では、teaser経験想起とtarget経験想起を同一参加者から収集することによって、ENDO（in press）の弱点を克服し、役割と社会的スキルがからかいの主観的意味生成に及ぼす影響を検討することを主目的とした。ここでは、ENDOの参加者に対して役割の割り当てを前回とは交換して質問紙実験を実施し、tearser経験とtarget経験の双方を同一の参加者から収集し役割を参加者内要因とした上で、比較検討する。この方法を用いることによって、先の知見が異なる参加者から得られたアーチファクトではないことを確認するためである。Kowalski（2000）は、同一参加者からからかい経験とからかわれ経験のデータを収集し、からかい経験とからかわれ経験への認知が異なることを指摘している。しかし、この研究においては、データ収集は同時期に実施されているため、対比効果が混入し、実際以上に２つのタイプの経験が異なるものとして把握された可能性が懸念される。本研究では、十分な時間間隔を置いて２度に分けてそれぞれの役割に立ったときの経験データを収集する。さらに本研究では、１つのからかい経験だけでなく、からかい一般に対する態度やからかい経験頻度についての調査項目を加え、からかいの理解において社会的スキルがなぜ効果をもつかを探ることを新たな副次的目的として設定した。

方　法

参加者：私立大学の大学生が、２度にわたって実施された質問紙実験に参加した。１回目の協力者（ENDO, in press）は182名であった。約６ヶ月後、２回目の質問紙実験が実施され、129名が協力した。２回の質問紙においてそれぞれ、回答者の携帯電話の番号の下３桁、誕生月日、および、学生番号の下１桁の３種の情報を収集し、これらに基づいて回答者のマッチングがおこなわれた。最終的に同一参加者による回答として同定されたのは、90名であった。本稿ではこれ以降、これら90名（男子22名、女子68名）を参加者と呼ぶ。

手続き：２種類の質問紙が作成され、１つはteaser経験記述用、他の１つはtarget経験記述用であった。１回目はtarget経験を記述した学生番号が奇数の参加者は２回目はteaser経験記述課題が割り当てられた。学生番号が偶数の者は、逆の順序で課題が割り当てられ、２回目はtarget経験記述課題が割りあてられた。最終的に前者は90名中の38名、

後者は90名中の52名であった。

Teaser経験記述用質問紙では、「誰しもからかったりからわれたりした経験をもっていることでしょう。これまでを振り返って、誰かをからかった経験を1つ思いだし、以下の質問に回答してください」と教示した。回答者の負担を軽減するために、teaserとtargetの関係、からかいの主題については選択肢を用意し、1つ選択するように求めた（表2を参照）。次に、どのようにからかったか、できるだけ正確に記述するように求めた。その後、「あなたの発言はどの程度冗談・ユーモアを意図したものだったか」、「相手はどの程度傷ついたと思うか」について、「全然…ない（1）」から「非常に（7）」までの7段階尺度上で評定を求めた。さらに、「相手に対する印象はその事件以降どのように変化したか」、「相手のあなたに対する印象はどのように変化したと思うか」の2つの質問に対して、「とても悪い方向へ（1）」「変化なし（4）」「とてもよい方向へ（7）」の表示を伴った7段階尺度上で回答を求めた。

もう1種類の質問紙は、target経験を記述しそれに対する認知を回答するためのものであった。教示および質問はteaser用と基本的に同じであるが、用語はtarget経験に適合するように、適宜修正された（例：「あなたの発言はどの程度冗談を意図…」は「相手の発言はどの程度冗談を意図…」に変更された）。

2回目の質問紙は1回目のそれと基本的に同じであった。ただし、以下の2点においては違いがある。第1に、1回目調査では社会的スキルの調査項目が設定されていたが、2回目調査では含めなかった。第2点として、2回目の質問紙においては、新たに、からかい経験の頻度（「私は、誰かをからかうことが多い」）、からかわれ経験の頻度（「私は、誰かからからかわれることが多い」）の2項目、そして、からかい一般に対する態度を測定するため以下の5項目を加えた：①からかいは、親しい関係の中で発生する行為だ、②からかいは、人生のちょっとしたスパイスのようなものだ、③からかいは、相手との関係をより親密にする、④からかいは相手への攻撃だ（※逆転項目）、⑤からかいは、いかなる場合も許されない（※逆転項目）。これらの項目では、「全く違う（1）」から「とてもそうだ（7）」までの7段階尺度で評定を求めた。

結　果

参加者の分類

社会的スキルの得点を基に中央値分割し、参加者を高社会的スキル（HS）群（43名）と低社会的スキル（LS）群（47名）に分類した。

からかい経験に関する認知

発話者のユーモア意図と対象者の傷つき感情のそれぞれについて、2（からかいにおける役割：target, teaser）×2（社会的スキル：HS, LS）の分散分析を実施した。前者は参加者内要因、後者は参加者間要因である。発話者のユーモア意図については、役割の主効果が有意であった（$F(1, 88) = 9.34, p < .01$）他、役割と社会的スキルの交互作用が有意傾向となった（$F(1, 88) = 3.91, p < .06$）。単純効果の検定をおこなったところ、target条件において社会的スキルによる違いが見られ、からかわれた時LS群はHS群に比べてteaserのメッセージの背後にユーモア意図を見いださなかった（$F(1, 88) = 5.23, p < .05$）。つまり、社会的スキルの低い者がからかわれた時、社会的スキルが高い者がするようには相手が冗談のつもりで言っているとは受け止めなかったのである。さらに、LS群は役割によってteaserのユーモア認知に大きな違いが認められ（$F(1, 88) = 12.67, p < .01$）、target条件（$M = 4.60, SD = 1.72$）の方がteaser条件（$M = 5.68, SD = 1.64$）よりも顕著に低かった。図1に示したように、LS群はからかう立場にあるときは、自分のからかい発言は冗談から発していると考えるが立場が替わってからかいの対象になったときは、teaserのユーモア意図を認めないことが明らかに示された。他方、HS群では役割間でのこのような違いは認められなかった（target条件：$M = 5.42, SD = 1.69$; teaser条件：$M = 5.65, SD = 1.43$; $F < 1, ns$）。

Targetの傷つき感情については、役割の主効果および　役割と社会的スキルの交互作用が有意であった（それぞれ、$F(1, 88) = 9.79, p < .01$; $F(1, 88) = 4.28, p < .05$）。単純主効果の検定をおこなったところ、target条件で社会的スキルの効果が有意であったが（$F(1, 88) = 5.51, p < .05$）、teaser条件では社会的スキルの効果は認められなかった（$F < 1, ns$）。またLS群では役割の違いが認められ、teaser条件（$M = 3.19, SD = 1.92$）よりtarget条件（$M = 4.45, SD = 2.12$）でtargetの傷つき感情が高いと報告した（$F(1, 88) = 13.51, p < .01$）。他方、HS群では役割による効果は認められなかった（target条件：$M = 3.44, SD = 1.92$; teaser条件：$M = 3.19, SD = 1.64$; $F < 1, ns$）。言い換えれば、LS群が誰かをからかう時には当該他者が傷つくとはあまり思わないが、自分がからかいの対象になったとき、著しく傷つき感情を経験することが明らかになった（図2参照）。社会的スキルの高い者はからかい行為者の立場では対象者の傷つきをあまり推測できない点で社会的スキルの低い者と違いがないが、高社会的スキルを持つ者は立場が替わってからかいの対象となってもあまり傷つかない。したがって、からかいの対象者の社会的スキルの水準によって、からかいが異なる意味をもつことが示唆された。

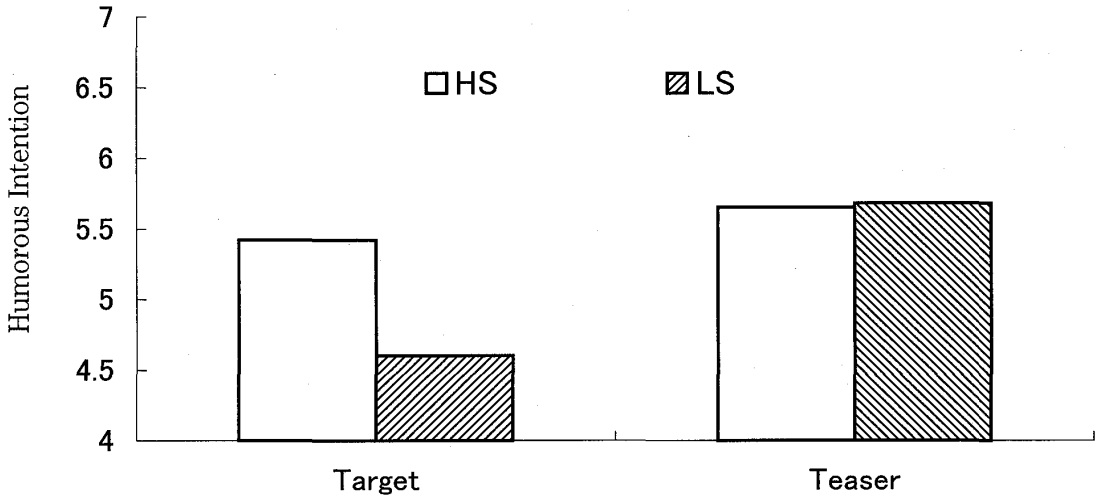

Figure 1　Means of humorous intention of the teaser as a function of role and social skills.

Note: LS = Participants who scored low on social skills, HS = Participants who scored high on social skills

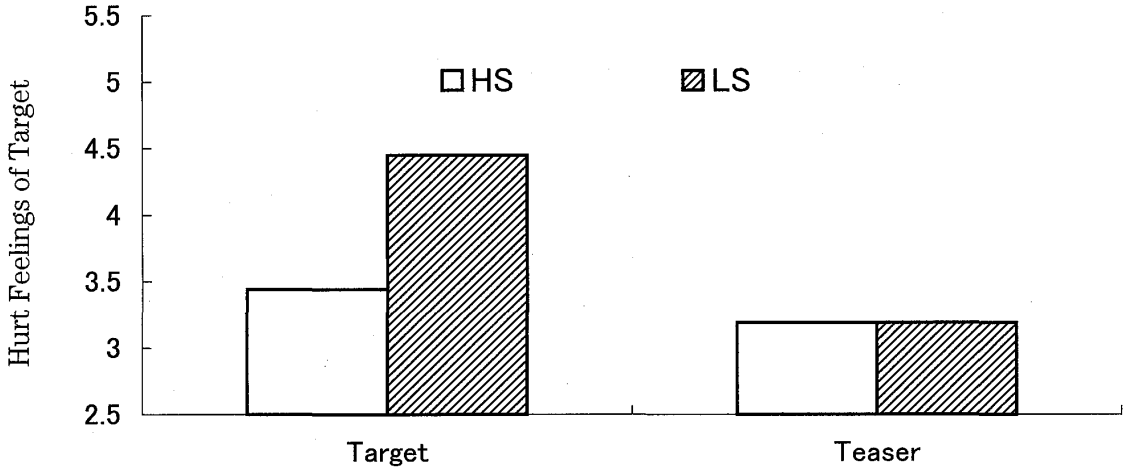

Figure 2　Means of hurt feelings of the target as a function of role and social skills.

Note: LS = Participants who scored low on social skills, HS = Participants who scored high on social skills.

では、からかいはその後どのような影響を当事者にもたらすだろうか。からかい事件の後、相手に対する印象（相手への印象）がどのように変化したかおよび相手からの印象がどのように変化したと感じるかの平均値を、target条件teaser条件ごとにLS群HS群について算出し、ワンサンプルt検定を用いて尺度中央値（＝4、変化しなかった）と比較した。各平均値は、表1に示したとおりである。まずtarget条件において、LS群では相手への印

象が有意に低下し（$t(46) = 3.92, p < .001$）、相手からの印象も低下の傾向を示した（$t(46) = 1.71, p < .1$）。つまり、LS群は、からかわれた際、相手への印象を悪化させ、また同時に相手からも評価を切り下げられたと感じる傾向があることが示された。他方、HS群はからかわれた時、やはり相手への印象を低下させたが（$t(42) = 2.76, p < .01$）、相手からの印象は変化しなかった（$t < 1, ns$）。対象者としてからかいを経験する場合、LS群とHS群は違いを示し、前者はからかわれると相手への印象を低下させると同時に、からかいを経験する以前と比較して、相手は自分のことを評価していないのだ（脱評価）と感じるが、他方、HS群は相手からのからかいを、相手の自分に対する脱評価と結びつけて考えなかったことが示唆された。Teaser条件においては、社会的スキルのレベルにかかわりなく、相手への印象と相手からの印象のどちらも変化していなかった（すべて、$t<1, ns$）。すなわち、LS群HS群ともに、teaserという役割においては、からかい経験は相手に対する見方も相手からの見方も変化させることはなかった。

Table 1　Means of change in impression to the other individual and oneself as a function of role in teasing and social skill (standard deviations in parentheses)

Role	Target		Teaser	
Social Skills	LS	HS	LS	HS
Change in own impression of the other individual	3.23 (1.34)***	3.51 (1.16)**	4.08 (0.93)	4.07 (0.83)
Change in the other's impression of oneself	3.81 (0.77)+	3.91 (0.75)	3.91 (0.97)	3.91 (0.72)

Note: LS = Participants who scored low on social skills, HS = Participants who scored high on social skills.
Higher numbers indicate impression positively changed.
Means differed from the central point of a scale (= 4; no change)
at $+p < .10$, $**p < .01$, $***p < .001$.

Table 2　Percentages of teases falling within each subject category

Role	Target			Teaser		
Social Skills	LS	HS	Overall	LS	HS	Overall
Behavior	21.3	7.0	14.4	21.3	25.6	23.3
Relationships	12.8	14.0	13.3	10.6	9.3	10.0
Hobby・Liking	17.0	7.0	12.2	2.1	11.6	6.7
Intelligence	6.3	0.0	3.3	10.6	2.3	6.7
Appearance	21.3	53.5	36.7	36.2	32.6	34.4
Family member	0.0	0.0	0.0	2.1	0.0	1.1
Other	21.3	18.5	20.1	17.1	18.6	17.8
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

Note: LS = Participants who scored low on social skills, HS = Participants who scored high on social skills.

からかいの主題

表2は社会的スキルと役割ごとのからかいの主題の各カテゴリの出現頻度を百分率で示したものである。Target条件では、社会的スキルによって主題が異なり（χ^2=14.24, $p<$ .05)、HS群はLS群よりも外見に関してからかわれた経験を多く報告した（$p<$ .05)。Teaser条件では、2群間でそのような違いは認められなかった。記述された経験の主題として最も多かったのは、target条件teaser条件とも外見に関するものであった。

からかい一般に関する経験頻度と態度

社会的スキルとからかい一般に関する経験頻度との関係を検討するため、からかい経験とからかわれ経験の頻度に関する自己報告をLS群とHS群で比較した。からかい経験については、LS群（M = 3.36, SD = 1.84）よりもHS群（M = 4.14, SD = 1.90）の方が多いと答える傾向がみられた（$t(88)$ = 1.98, $p<$.06)。また、からかわれ経験については、LS群（M = 3.81, SD = 1.65）よりもHS群（M = 4.40, SD = 1.73）の方が多いと答える傾向がみられた（$t(88)$ = 1.65, p=.10)。したがって、HS群は少なくとも自己報告によれば、LS群よりも日常的にからかったりからかわれたりすることを多く経験している傾向があった。

からかい一般に対する態度を測定するための5項目に対して因子分析（主成分分析）をおこなったところ1因子であり、クーロンバックのα係数も十分な高さを示したので（α = .802)、5項目の合計得点をもって、からかいに対する肯定的態度得点とした。社会的スキルとこの態度得点との相関を求めたところ、r = .267（$p<$ .05）と有意な低い正の相関が認められた。すなわち、社会的スキルの高い者ほど、一般にからかいは楽しく関係促進的なものだと考える傾向のあることが示された。社会的スキルはからかい頻度（r = .300, $p<$ .01）やからかわれ頻度（r = .180, $p<$ .10）とも相関関係がみられた。また、からかいへの態度はからかい頻度（r = .257, $p<$ .05）やからかわれ頻度（r = .215, $p<$ .05）と有意な低い正の相関が認められた。

考　察

本研究では、同一の参加者からからかい経験とからかわれ経験の双方のデータを収集し、からかいにおける役割と社会的スキルがからかいできごとの意味に与える影響を検討した。その結果、ENDO（in press）の結果は役割を参加者内デザインとした本研究においても再現された。すなわち、からかう立場にあるとき、社会的スキルの低い者は社会的スキルの高い者と同程度に、それはユーモア意図から発したものだと認知しており、したがって、

対象者の傷づき感情はそれほどないと理解していた。しかし、立場を替えて反対にからかいの対象者となったときは、受け手の社会的スキルによって主観的な受け止め方は異なり、社会的スキルの低い者は相手（=teaser）のメッセージの背後にユーモア意図を読み取らず、そのため傷つき感情をより強く経験していた。つまり、社会的スキルが低い者は、自分がからかわれる立場にある時にはからかいを否定的に受け止めるが、反対に自分がからかう立場に立つ時は、自分のからかいを相対的に肯定的なものとみなす傾向があり、役割による非対称性が見られた。他方、社会的スキルの高い者では、役割によるそのような非対称性は認められず、からかいの対象となった場合でも、誰かをからかう立場の時と同程度に、からかう者のユーモア意図を認め、したがって傷つき感情を経験する程度は低かった。

大渕（2006）は、からかいが関係促進機能を発揮するためには、『からかわれた対象が傷つかないことが原則である。傷ついてしまうなら、対象の側には怒りや恨みが、また行為者の側には罪悪感が生じ、関係はむしろ阻害される』（p.25）と述べ、からかわれた側の傷つき感情が、からかいのもつ肯定的機能と否定的機能を分かつことを指摘している。本研究は、この分かちは社会的スキルのレベルによって生じ、からかいのもつ曖昧さは、対象者の社会的スキルを通して、いくつかの異なる意味に翻訳されていくことを示唆した。さらに本研究は、社会的スキルがなぜからかわれる側の反応を分かつかについて、いくつかの点を示唆した。社会的スキルの高い者は、本研究で示されたように、日常生活の中でからかわれたりからかったりを比較的多く経験している者たちであり、またからかいというものに対して肯定的な態度をもっていた。相関は因果関係を明らかにせず、経験の多さが社会的スキルを向上させるか否かはわからない。社会的スキルがあるがゆえに、他者と親密な相互作用を展開し、その中で自然発生的にからかい・からかわれを経験していると考えることもできる。いずれにせよ、からかい・からかわれの双方を多く経験し、からかいを安全で楽しいものとして経験することと、あるからかいを受けたときに過度に否定的に受け止めないこととは関連していると考えられる。安全な親密関係の中でからかい・からかわれることを快経験として重ね、からかいというものに対する肯定的な態度をもつことは、ある時点であるからかいの対象となったとき、過去の快経験からの一般化がおき、過度に否定的な受け止めの回避、傷つくことの防止につながるかもしれない。

今日いじめが社会問題化しつつある中で、からかいといじめを完全に重ね合わせた上でからかいを悪として否定的側面からのみとらえること、またセクシュアル・ハラスメント防止のためにからかいを健全な人間関係構築や人権の妨害行為とみなすことが、次第に社会のコンセンサスとして形成されつつあるように思われる。本研究で収集したからかい・

からかわれ経験は、教育・職場領域で問題視されているいじめやセクシュアル・ハラスメントの1種としてのそれとは、おそらく内容の深刻度やからかう者の攻撃性などで異なり、単純に対応させることには十二分に抑制的であることが求められる。しかし、そのことを自戒しつつも、からかいを否定的な側面からのみとらえ厳格に抑制をはかることは、却って親密な人間関係を築き発展させていく上でマイナスに働く可能性があることを指摘してもよいと思われる。本研究結果が示唆するように、安心できる人間関係の中で発生するからかいは、社会的スキル向上に資する可能性があり、また親密な関係であることを確認し笑いを共有する機会ともなりうるからである。からかいは、場合によって人によって、他者を痛めつける悪とはならない場合もありうるのである。そして、そのような経験を重ねることで、からかいに対する否定的な解釈をせずに済む可能性があるかもしれない。

その一方で、からかう立場の者の視点からは、からかわれる者の受け止め方や（おそらくは否定的な）感情を推測するのが困難であることを改めて確認したい。からかわれる側とからかう側という社会的相互作用の両端にあるエージェントにおいて、言動の意味生成を強く規定する“冗談”や“ユーモア”などのからかう側の意図は共有されておらず、後者にとってのみ明らかである。行為者は自らの内面に存在する感情や意図に基づいて対人的言動を発するが、その言動の対象となる受け手（からかわれる側）は、それを共有してないがために、行為者とは異なった意味をからかいの言動に付与する。しかし、受け手自らが生成した意味を「真実」としてしまい、受け手にとって行為者の視点を取得することが困難であるのと同様、受け手がからかい言動に与える主観的意味は行為者自身のそれとは異なることを、行為者が理解するのは困難なようである。ある社会的状況に関わる複数の人々が一様にあるひとつの意味を生成するためには、同じ情報を共有し、それを同じように利用することが必要である。しかし、人は必ずしも内面のすべてを言動によって表出するわけではなく、限定的な情報としての言動を自らの観点で考える思考・認知・判断の自己中心的性質ゆえに、対人的葛藤や対立・誤解などが生じてしまうと考えられる。

引用文献

Eder, D. (1993). “Go get ya a Frenchi!” Romantic and sexual teasing among adolescent girls. In D. Tannen (Ed.), *Gender and conversational interaction,* Pp. 7-31. New York: Oxford University Press.

Eisenberg, A.R. (1986). Teasing: Verbal play in two Mexicano homes. In B.B. Schieffelin & E. Ochs (Eds.), *Language, Socialization across Cultures. Studies in the Social and Cultural Foundations of Language,* No.3, Pp. 182-198. New York: Cambridge University Press.

ENDO, Y. (in press). Divisions in subjective construction of teasing incidents: Role and social skill level in the teasing function. *Japanese Psychological Research.*

Keysar, B., Barr, D.J., & Horton, W.S. (1998). The egocentric basis of language use: Insights from a processing approach. *Current Directions in Psychological Science,* 7, 46-50.

Kowalski, R.M. (2000)."I was only kidding!": Victims' and perpetrators' perceptions of teasing. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26, 231-241.

Kowalski, R.M. (2004). Proneness to, perceptions of, and responses to teasing: The influence of both intrapersonal and interpersonal factors. *European Journal of Personality*, 18, 331-349.

Kowalski, R.M., Howerton, E., & McKenzie, M. (2001). Permitted disrespect: Teasing in interpersonal interactions. In R.M. Kowalski (Ed.), *Behaving Badly: Aversive Behaviors in Interpersonal Relationships,* Pp. 177-202. Washington, DC: American Psychological Association.

Kruger, J. 1999 Lake Wobegon be gone! The "below-average effect" and the egocentric nature of comparative ability judgments. *Journal of Personality and Social Psychology,* 77, 221-232.

Kruger, J., Gordon, C.L. & Kuban, J. (2006). Intentions in teasing: When "just kidding" isn't good enough. *Journal of Personality and Social Psychology,* 90, 412-425.

Leary, M.R., Springer, G., Negel, L., Ansell. E., & Evans, K. (1998). The causes, phenomenology, and consequences of hurt feelings. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 1225-1237.

文部科学省（2006年９月）．生徒指導上の諸問題の現状について（２-７）いじめの様態〈http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/09/06091103.htm〉検索日 2006.9.20.

大渕憲一（2002）．人間関係と攻撃性　島井哲志・山崎勝之（編）攻撃性の行動科学―健康編　Pp.17-37. ナカニシヤ出版.

大渕憲一（2006）．いじめにおける「からかい」．児童心理　臨時増刊　No.843 いじめの予防と早期解決，23-28. 金子書房.

Reis, H.T., Nezlek, J., Wheeler, L. (1980). Physical attractiveness in social interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 38, 604-617.

Roberts Jr. W., & Coursol, D.H. (1996). Strategies for intervention with childhood and adolescent victims of bullying, teasing, and intimidation in school settings. *Elementary School Guidance Counseling*, 30, 204-212.

Shapiro, J.P., Baumeister, R.F., & Kessler, J.W. (1991). A three component model of children's teasing: Aggression, humor, and ambiguity. *Journal of Social and Clinical Psychology,* 10, 450-472.

総理府（2002年７月）．男女共同参画の現状と施策〈http://www8.cao.go.jp/survey/h14/h14-danjo/index.html〉検索日 2006.9.20.

Windschitl, P.D., Kruger, J., & Simms, E.N. 2003 The influence of egocentrism and focalism on people's optimism in competitions: When what affects us equally affects me more. *Journal of Personality and Social Psychology,* 85, 389-408.

Winfrey, G. (1993). Just teasing. *American Health*, 18, 66-68.

本研究は、日本学術振興会の科学研究費（課題番号15330134、研究代表者　唐沢穣）の助成を受けた。

―2006.12.25受稿―